今此等の人々が回鶻なる部族の名稱につきて論ずる所を見るに、默棘連可汗の碑文第三十七行第十六行に uiγrltbr 卽ち Uiγur iltäbär（回鶻頡利發）と讀まるべき文字あり、諸種の突厥碑文中 Uiγur の名の見ゆるものは實に此の一箇所に過ぎず、漢史の記する所によれば、當時突厥と回鶻との關係は甚だ深かりしにも拘はらず、此の如く突厥碑文中に其の見ゆること少きは、頗ぶる奇怪なるが如くにも思はる、然るに碑文には Oγuz 若しくは Tokuz Oγuz 卽ち九〔姓〕オグーズなる部族の名が屢記さるゝより、多くの學者は此の名稱に注意し、之と九姓回鶻との間に於ける關係を尋究せんとするに至れり、卽ち

㊀Radloff 氏は、初め闕特勤碑の突厥文中に、Uiγur の名が突厥の敵として存せざるを見るや、碑文の Oγuz なるものは回鶻に外ならざるべしと考へしが、後默棘連可汗の碑に上述の如く其の名の出づるを見て、こゝに兩者全く別のトルコ族なりと爲し、此の時に至る迄回鶻の名の見えざるは、當時此の部が Baikal 湖附近に住み、隣部（恐らく Tatar 及び Oγuz）に服屬したりしが爲なるべしとなし（一八九五年出版 Die alttürkischen Inschriften der Mongolei, S. 226 u. 427）

㊁Thomsen 氏は此の翌年出版の Inscription de l'Orkhon に於て Oγuz なる名は屢〻引用せられ又トルコ族の傳說中に好く知らるゝ名なるが、此處（碑文 I. E. 14 及び II. E. 12 を指す[3]）にては九姓より成れる民族の名（Toquz Oγuz 卽ち九オグーズ、此の名は此の外にも I. N. 4; I. S. 2; II. E. 1; 〃 29; 〃 35; 及び Onghin 碑の第十行にも見ゆ[4]）なり、突厥の北（北西か）（I. E. 28; II. E. 23）Tola 河附近（II. E. 30）及び Selenga 河の近傍（II. E. 37）に國を建てたる民として知らる、突厥と近親なる種族にして、之に從屬したるものなり